

## 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 127 / 号	氏名	中村 洋輔
審 査 担 当 者	主 査	山 木 宏 一	(印)
	副主査	石 藤 公 昭	(印)
	副主査	谷 脇 孝 幸	(印)
主論文題目： 題 名 Prognostic factors affecting clinical outcomes after arthroscopic rotator cuff repair: importance of functional recovery by 3 months after surgery (鏡視下腱板縫合術の術後機能に影響する予後因子：術後3ヶ月までの機能回復の重要性)			

### 審査結果の要旨（意見）

肩関節鏡視下腱板縫合術の術後における治療成績を判断できる指標がわかるものであった。疾患に対して手術だけでなく、その他のアプローチにより、臨床成績を良好なものにできることは、今後の治療に有用である研究であり、有意義な論文であると考えられる。実臨床に即した有用な研究であり博士論文として適するものと判断した。

### 論文要旨

肩腱板断裂に対する鏡視下腱板修復術後の治療成績は比較的安定しているが、一方で良好な結果が得られない症例も存在する。本研究では術後24ヶ月では日本整形外科学会肩関節疾患治療成績判定基準（JOAスコア）83点を獲得するための術前・術後因子について検討した。

対象は2012年1月から2014年12月までに鏡視下腱板修復術を施行した163例のうち、術後2年以上経過観察可能であった71例71肩を対象とした。これらの患者の術後24ヶ月時点でのJOAスコアを用いて83点以上のA群（59例）と83点未満のB群（12例）の2群に分け、術前および術後（2・3ヶ月）因子について単変量/多変量解析を行った。

全症例の平均JOAスコアは術前から術後24か月で有意に改善していた（ $P<0.05$ ）。単変量解析では、可動域（術前外転、術後挙上・外転・内旋・外旋）、術後疼痛レベル（VAS：10点満点）、部分修復、Cofield分類（術前）、retraction（術前）、width（術前）が有意な因子であった（ $P<0.05$ ）。多変量・ROC曲線解析では術後2ヶ月のVAS <5点および術後3ヶ月での挙上 >110°（ $P<0.05$ ）が有意な因子であった。

術後24ヶ月でJOAスコア83点以上を獲得するためには、術後2ヶ月でのVASが5点未満あるいは術後3ヶ月時の挙上110°以上を達成する必要がある。